

今週のメニュー

[トピックス](#)

子どもたちの夏休み自由研究サポートで環境授業
- 「NPOスポーツネットワーク」主催 -

[随想](#)

古代ヤマトの遠景(48) - 【中国・朝鮮半島情勢(2)】 -

信越化学工業(株) 木下 清隆

[編集後記](#)

トピックス

子どもたちの夏休み自由研究サポートで環境授業 - 「NPOスポーツネットワーク」主催 -

逗子市民交流センターでの市民の会に誘われて、色々な分野の方のお話を聞く機会を持ちました。今年3月には、「次世代に何を残せるか? - 環境問題を通して -」の演題で講演を行いました。その時に参加された蓼沼さんから今回の環境授業のお話を伺いました。

蓼沼さんが主宰している「NPOスポーツネットワーク」は「様々なスポーツを通して年齢を越えた人と人との繋がりや、親と子のコミュニケーション、そして自然のエネルギーを使ったスポーツの素晴らしさを伝えて行く」ことをテーマに取り組んでいる市民団体です。今回の「夏休み自由研究サポート」は、子どもたちに「生活環境に関心を持って欲しい」との願いから、夏休みの自由研究テーマを提供する機会として企画されたものです。

7月31日に、同じ逗子市民交流センターで、「CO2とエネルギー」のテーマで環境授業を行いました。このテーマは、全国の小学校での出前授業で話しているもので、石油を初め貴重な地下資源の大切さ、そのほとんどを輸入に頼っている日本の実情、プラスチックがその貴重な石油の一部で作られていること、そのプラスチックが生活の中で如何に役立っているか等を実際のサンプルや簡単な実験で説明しています。



環境授業の様子

当日、小学生の子どもたちと保護者の方を中心に20名弱の参加があり、熱心に話を聞いて頂きました。質問のプレゼントに用意したキャラクター消しゴムは子どもたちに大受けで、瞬く間に底を尽きました。後日、主宰者と保護者の感想が寄せられ、「子どもたちの笑顔がとても素晴らしい」、「大変勉強になった、大人が聞いてもためになるお話だった」、「環境問題の切り口として子どもたちが飽きなかった」との声を頂き、役立てて貰ったことにホッとしました。

これからも、市民団体の活動に積極的に参加し、社会貢献の一環として、次世代の子どもたちに環境授業を行い、押し付けでない知恵と感謝の心を伝えて行きたいと考えています。

他にも、「プラスチックの基礎知識」、「エネルギー資源と地球温暖化問題」、「プラスチックとリサイクル」などを取り上げ、子どもたちのレベルに合わせた内容にしたいと考えています。是非、これからも、「出前授業」を受けて見たいと思われる先生や市民団体の世話役の方は、当協会にお申し出下さい。楽しみにお待ちしております。(了)

随想

古代ヤマトの遠景(48) - 【中国・朝鮮半島情勢(2)】 -

信越化学工業(株) 木下 清隆

<匈奴・鮮卑>

秦は前 223 に楚、前 222 に燕、前 221 年に斉を滅ぼし天下を統一する。その頃、北方民族の匈奴も諸部族が統合され、初代単于頭曼が登場する。単于とは全部族の統合者に対する称号である。頭曼は単于になると秦攻撃を開始する。これに対し始皇帝は、蒙恬に匈奴を討たせ、更に戦国時代の燕・趙・秦等によって築かれた長城の修復と、延長事業を推進して万里の長城を拡充する。一連の秦の反撃で、匈奴は外モンゴルへ追いやられて鳴りを潜める。しかし、秦の天下は続かない。前 210 年に始皇帝が亡くなると翌年の前 209 年、頭曼の長子冒頓は第二代の単于となる。中原においては劉邦が垓下に項羽を破って漢を建てる。強大化した冒頓の匈奴と漢は必然的に衝突する。ところが有力将軍の匈奴への投降があったりして、劉邦は敗れてしまう。その結果、漢は匈奴に対し、皇女を単于に差し出す、毎年、絹・酒・米等を献上する、といった屈辱的な約束をさせられる。



前漢時代の中国と近隣諸国

このような漢の劣勢を一気に覆してしまう人物が現れる。それが第七代皇帝の武帝である。彼は前 141 年に 15 歳で皇帝になると、匈奴を討つために、西域の大月氏と同盟を結ぶことを考え、前 139 年に張騫を派遣する。匈奴が興隆する以前の北方は、東に東胡、西に月氏が存在し、間に挟まれた匈奴は弱小国だったらしい。その匈奴が統一され二代目単于の冒頓が誕生すると、彼は瞬く間に東胡と月氏を討ち滅ぼしてしまう。西域に逃れた月氏は、その残党の一部が現在のキルギス地方に大月氏を作り、残りが青海省辺りに小月氏を建てた。青海省は現在のチベット自治区の北方一帯である。この大月氏と組んで匈奴を討とうと云うのが武帝の戦略である。

ところが張騫は漢を出ると直ぐに匈奴に捕まってしまう 10 年近くも抑留される。やっとの思いで大月氏に到着するが、彼らは匈奴に対する復讐の念も消えうせ、平和な生活に満足して同盟の話には乗らなかった。張騫が漢に戻ったのは 13 年後のことである。さすがに武帝も痺れを切らし、張騫帰国以前の前 129 年に匈奴との全面对決を決意する。戦いは一進一退を続け、十年以上に亘って死闘を繰り広げるが、張騫のもたらした情報が役立ち始め遂にこれを破る。これにより匈奴はゴビ砂漠の北へ移動する。現在のモンゴル地域である。勢いに乗った武帝は、更に西域地方の馬が欲しいとの理由で侵攻し、前 104 年には有力部族を降伏させる。これ以降、西域は漢の勢力下に入った。

武帝との戦いに敗れた匈奴は、東匈奴と西匈奴に分裂するが、この両者がまた争いを続ける。勝ち目が無いとみた東匈奴の単于は、漢に頭を下げて援軍を乞う。匈奴が入朝するなど前代未聞の出来事に漢は大歓迎し、援軍を出す。このような情勢の変化に、西匈奴は劣勢に立たされて徐々に追われる。最後は西域の彼方で漢軍によりその単于は討たれ、西匈奴はここに滅びる。その場所は康居というアラル海に近い所で、現在のカザフスタン地方である。こんな西域の奥地まで漢軍は追って行った。前 36 年のことである。

東匈奴の単于は漢との関係強化のために、皇女の降嫁を求める。漢はこれを快く受け入れ、皇女の代わりに後宮の王昭君を賜る。これが後世になって有名となる「王昭君の匈奴降嫁悲話」である。時の元帝は、後宮の女性達を似顔絵師に描かせ、一番醜女に描かれている女性を選んだ。選ばれた王昭君が別れの挨拶に皇帝の前に出たとき、そのあまりの美しさに元帝は目を奪われる。いまさら決定は覆せない。後で、王昭君が画工に賄賂を贈らなかったからだ、と知った元帝は激怒し画工の首を刎ねたという。前 33 年頃の話である。

その後、後漢時代になるとかつての東匈奴の後裔者たちは、再び内紛に明け暮れる。挙句の果てに分裂し、今度は北匈奴と南匈奴に分かれる。この内、北匈奴は鮮卑・烏桓に攻められ、西へ西へと追われてゆく。四世紀のヨーロッパを恐怖に陥れたフン族は、彼らではないかとの説があるが、定説とは成っていない。

鮮卑・烏桓は昔の東胡から生まれた国々である。先に述べたように匈奴の第二代単于、冒頓ぼくとつによって東胡は討ち滅ぼされるが、逃れて生き残った者たちによって、鮮卑と烏桓の二国が誕生した。この二国が興隆してくるのは匈奴の勢力が衰える一世紀頃からで、烏桓は三世紀に入ると弱体化し、漢あるいは鮮卑に同化してしまう。ところが、鮮卑は匈奴に入れ替わるように、北方の巨大勢力に成長する。後漢の桓帝時代(146~167)に、鮮卑に檀石槐だんせきかいが登場してくると、かつての匈奴の全盛期よりも更に広大な領域を治めるようになる。しかし、檀石槐が 180 年頃死ぬと部族間の抗争が激しくなり、この混乱の中から有力部族である鮮卑拓跋部たくはつが台頭し、大きな力を持つようになる。さらに東北地方では鮮卑慕容部が勢力を伸ばしてくる。

後漢が滅びると、魏・呉・蜀の「三国時代」になる。魏は漢王から禅譲を受けていることから正統性があるといえるが、呉も蜀も皇帝を名乗ったことから、三国鼎立の時代となる。魏は華北をその領域としていたことから、朝鮮半島或いは倭との深い関係が生まれてくる。この魏から禅譲を受けた晋が中国を統一するが、統一が成ると晋帝司馬炎は、女色

におぼれ政治を省みなくなる。このため国内が乱れて「八王の乱」が発生するが、皇族同士の殺し合いが続き、この混乱に乗じて、304年に匈奴の劉淵が匈奴大単于を自称し、「前趙」を建国する。この時をもって「五胡十六国時代」が幕開けする。晋はこの劉氏に滅ぼされるが、晋帝の王族司馬睿が建康（南京）に逃れて晋を再興したことから、これを東晋と名づけ、これまでの晋は西晋と呼ばれるようになる。東晋が南方をその勢力域としたことから、華北が政治的な空白地帯となる。

この空白地帯に躍り出てきたのが、匈奴・鮮卑・羯・氐・羌等の五胡である。先の劉淵はその嚆矢である。彼らが建てた国が沢山あったことから、「五胡十六国」時代と呼ばれるようになる。「胡」とは漢民族が北方・西方の異民族に名付けた蔑称である。匈奴・鮮卑は北方系であるが、羯・氐・羌は西方系といえる。また、彼らが建てた国の数も二十カ国を超えていた。この五胡十六国時代は304年に幕開けするが、この混乱の時代を統一したのが鮮卑拓跋部の「北魏」で、439年のことである。約140年間も彼らは戦い続けたことになるが、南方の東晋は「宋」に引き継がれて健在であり、ここに北魏と宋が対峙する「南北朝時代」が始まることになる。

秦以降の中国の歴史を分かりやすく説明すると、秦と漢による統一国家が約400年続いた後、魏・呉・蜀の「三国時代」に突入する。これを魏の後継国である晋が中国を統一するが、統一後、休む間もなく南北に分裂する。この頃から「五胡十六国時代」に入る。南方は東晋が治めるが、北方即ち華北は、漢時代・三国時代に定住し始めた匈奴・鮮卑等の胡と呼ばれる民族がそれぞれ独立宣言し、收拾が付かなくなる。これを統一したのが北魏で、この間、約140年掛かった。従って、「五胡十六国時代」とは、華北代表の選抜戦の時代だったことになる。これで北の代表が決まったことから、以後、「南北朝時代」が到来することになる。南朝は東晋のあと宋・齊・梁・陳と継承されて行き、北朝の方も東魏・西魏に分裂するが、最後は北魏系の「隋」が天下を統一する。北魏は鮮卑拓跋部が建てた国であることから、隋もこの系統だということになる。隋は程なく崩壊し、このあと「唐」が建国されるが、この唐も北魏系の国である。

なお、三国時代の「魏」は曹操を初代とする曹氏が建てたことから「曹魏」とも呼ばれており、拓跋部が創建した「北魏」とは異なる国である。卑弥呼が朝貢したのは曹魏の方である。また、五世紀の倭の五王達が朝貢したのは、主として南朝の宋である。420年に、劉裕が東晋からの禅譲を受け「宋」を建てたことから一般に「劉宋」と呼ばれており、960年に趙匡胤が建てた「宋」とは区別されている。この劉宋はさらに「齊」へ禅譲され、479年に滅亡するが、建国から滅亡までの約60年間に倭の五王の朝貢は集中している。この時代のみ朝貢が特化されているのは、不思議といえば不思議である。

(つづく)

前回の「古代ヤマトの遠景」(47) - 【中国・朝鮮半島情勢(1)】 - は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/279/mag_279.pdf

以前の「古代ヤマトの遠景」は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/list/yamato_list.pdf

編集後記

暑い日が続いていますが、涼しい思いをしたのでご紹介します。

先日、日本国内で一番クラゲのたくさんいる水族館に行ってきました。その水族館は日本で一、二を争うくらい歴史のある水族館で、入場者が激減するのをクラゲの展示を始めてから持ち直したことで知られている水族館です。館内には「クラネタリウム」と呼ばれるエリアに多くの種類のクラゲを見ることができます。発光するクラゲや巨大なクラゲなどなど。



普段は刺されると痛い、海に大量のクラゲが発生して漁業に影響を与えるなどマイナスのイメージが多いクラゲたちですが、水槽の中で優雅に泳ぎ、光に輝くクラゲたちはとても美しいものでした。遠くから見に行く人が多いのがうなずけました。(リマル)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp